
ぶらす・まいなす・ゼロ

鱗斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぶらす・まいなす・ゼロ

【Nコード】

N2760T

【作者名】

鱗斗

【あらすじ】

$+1 + (-1) = 0。$

その数式のように、異常^{プラス}と過負荷^{マイナス}は、一人の虚無^{ゼロ}を生み出した。

何も無い虚無感^{ゼロ}の少年の不安定な感情の中に起こる、異常と過負荷に対する葛藤を描くストーリー……。……を目指して頑張ります。

第序箱 何も、無い。

1

僕は、空っぽだった。

ぶらすなお母さんとまいなすなお父さん。

まるで数学の式に当てはめたかのように、二人の子供である僕はただ、0^{ぜろ}だった。

□
ぶらすでもまいなすでもない空^{ぜろ}っぽな僕は友達も感情も無い、虚^ぜ無^{ぜろ}だったんだ。

2

神宮^{じんぐう} 零^{ぜろ}

それが、僕が貰った名前だった。

2

神宮 零。

彼には、感情、というものが存在しない。

話す時も、ただ機械的に、必要最低限の言葉しか話さない。

その理由は、彼の性質スケルにあった。

虚無感。^{+ - 0}

それは、異常プラスでも過負荷マイナスでもない存在。

それ故、プラスかマイナス、どちらにも傾きうる、不安定な存在。

自分が何者かさえ、分からない。

それは、残酷にも、零の感情を虚無ゼロにした。

第序箱 何も、無い。(後書き)

0は何もないだけで無く、無限の可能性を秘めている。

例えば、

+1 0 に -1 を足しても、+ のままだが、0 に -1 を足したら、- になる。

逆に、0 に +1 を足せば、0 はたちまち + になる。

そこに更に、-1 を足せば、再びそれは0になる。

単純な計算だけど、人間に当てはめたら、それは非道く複雑なものになる。

そんなストーリーです。

第1箱 「何かを持っても、いいのかなあ？」

1

箱庭学園1年0組。

その教室には、たった一人、虚無^{ゼロ}の少年が居た。

名前は、神宮 零。

このクラスは、授業も無ければ、登校義務も無い。

しかし、皆学校を休んでいる訳では無く、“元々、このクラスには神宮 零、一人しか居ない”。

5

学校だろうと、どこに行っても、何も無い。

やはり、零は虚無^{きよむ}なのだ。

2

箱庭学園・生徒会室。

ここには、『24時間、365日、誰からの相談でも受け付ける』それをモットーとした組織、生徒会執行部がある。

「ところで、皆の衆。1年0組、というのを知っておるな？」

生徒会長・黒神 めだか。

1年13組に所属していて、ジ・エンド完成というアフノーマル異常を持つ、才色兼備、指示率98%を誇るスーパー生徒会長である。

「ああ、知ってるぜ。確か、理事会が最近発足させた新しいクラスだろ？」

庶務・人吉 善吉

1年1組に所属する、ノーマル普通。外靴で戦う事を前提とした、格闘技・サバットを極めている。

「それだけじゃない、理事会が絡んでくるとなると……」

書記・阿久根 高貴

2年11組に所属するスペシャル特別。元柔道部で、中学時代は破壊臣と呼ばれていた。

「フラスコ計画……ってゆーのもかんけーしてくるのかな？」

会計・喜界島 もがな

1年11組に所属するスペシャル特別。競泳部に入部しており、生徒会と掛け持ちしている。肺活量が自慢で、それを武器として戦う事も可能。

「かつ！こっちは、13組の関係で忙しいのに、理事会は次のプラ

ンを用意してるたあ、気楽なもんだぜ！」

「まあ、そういうな、善吉。……それで、我々は1年0組とやらを調査したいと思っている。……球磨川の事も気掛かりだが、今は派手な動きをしない事を祈ろう」

「祈る、ですか。……まあ、0組の件が無かったとしても、 - 13
組の派手な行動は控えてほしい所だけだね」

「うむ、だが今は0組だ。理事会の思惑通りにはさせまいよ」

「むただよ」

突如、生徒会室に謎の音が響いた。

その声の主である少年は、音も無ければ、気配も無く、誰も気が付かないまま、生徒会室に入り込んでいた。

「貴様、見ない顔だが……1年0組の者か？」
めだが、自分でも“気が付かなかった”気配も何もない少年に質問する。

「うん」

何もない少年は言う。感情さえも感じ取れない、単調な声で。

「そうか。名前を教えてはくれぬか？」

「神宮 零」

また、一言。

まるで、不必要な物、全てを取り除いた――否、全てが元々無かったかのような喋り方。

「では、神宮同級生。先程の無駄、とは一体どういうことだ？」

「なにもないから」

「何も無い、とは？」

「文字どおり」

「そうか、……すまん、善吉代わってくれ……」

「めだかちゃんが言葉で負けた!!」

「じゃ、これで」

と、零は必要最低限の言葉を残して帰ろうとした。

「待て待て待て!! 一体何しにきたんだお前は!!」

「悩み相談」

「じゃあ、悩みを言えよ! 悩みを!!」

「僕は、なにもない虚無んだ」

「――!!」

めだかが息を飲んだ。

それは、異常故に分かる、零の底知れぬ虚無感を知って。

「だから、」

「……僕は、何かを持っても良いのかな、って」

初めて見せた零の感情。

それは、人間の感情の多くを占めている、“欲”だった。

めだかは、その気持ちに答えるために、慎重に言葉を紡ぐ。

「もちろんだ、神宮同級生。何かを持つ事は、時に何よりも大切なものになる。だからお前は、何かを持ってもいいんだよ」

「……ありがとう、それじゃ」

と、再び音も無く生徒会室を後にした零。その顔は、これまでのような無表情ではなく、少し笑っていたようにも見えた。

第1箱 「何かを持っても、いいのかなあ？」（後書き）

生徒会の＋な人柄にあてられ、少しながらも感情を見せた、零。

だが、彼はあくまでも虚無^{ゼロ}だから、＋の感情はやがて同等の－の感情をあてられる。

次回はそんな、お話。

第2箱 『所詮、君は虚無感へ空っぽなんだ』（前書き）

お気に入り登録数が七件に……

読んで下さり、本当にありがとうございます！

第2箱 『所詮、君は虚無感へ空っぽなんだ』

1

なんだろう。

彼らと居ると、空っぽのはずの僕に、“何か”が満たされた気分になる。

不思議だ。

そして、怖い。

僕の心が満たされるのは、駄目なんだ。

何もかも、空っぽの僕は、満たされたら、また、空っぽになる。

そんな気持ちには、なりたくない。

2

『やあ、こんにちは。君が1年0組の、神宮 零ちゃんだね！僕は球磨川 楔。夜露死苦ね！！』

満たされた零の心が、再び、虚無^{ゼロ}に還る。

この過負荷^{マイナス}の少年、球磨川 楔によって。

+13に-13を足せば、0になるように。

それが、虚無^{ゼロ}である零の心でもあり、零の虚無感《+・0》というスキルでもある。

「うん」

空っぽになった零は、再び感情が無い、平坦な声で返事をする。

『そうかそうか、ところでさっき君、生徒会室でめだかちゃんに何か相談してたでしょ？』

「めだかちゃんって誰？」

『そっか、君は転校してきたばかりだったね！あのエロい制服の可愛い女の子だよ！』

「そうなんだ。確かに相談した」

『なんて聞いたんだい？』

「何か持ってもいいですか」

『だめ』

と、まるでめだかの全てを否定するかのように、球磨川は、ついさっきまで存在していた、零の感情を踏みにじった。

「なぜ？」

『だめに決まっているじゃないか！元々何も持っていない君なんだもん！今更何か持ったところで邪魔になるだけだぜ？良い事なんか一つもない。それに、』

『所詮、君は虚無感^{空っぽ}なんだ。今更何も持てやしないさ！』

「……うん、そうだね！所詮僕は虚無感^{空っぽ}なんだ！ありがとう！球磨川さん！おかげで僕は――」

ドガアッ！！！！

球磨川の身体が壁にめり込んだ。

「怒り、っていう感情を、知りました」

『……うん、うん！やっぱり君は完璧な虚無^{ゼロ}だ。良い子な異常^{プラス}と一緒に居れば、良い子な優等生に、欠陥品のような過負荷^{マイナス}と居れば、悪い子な劣等生に、簡単に染まってくれる！』

「黙れ、僕はムシャクシャしているんだ。とにかく、黙って全身の

骨を折られてる」

『いいね、それでこそ、僕が望んだ虚無感印の過^{ゼロ}負^{マイナス}荷だ!!』

バキィッ!!

何かが碎ける音が、誰もいない廊下に、響きわたった。

第2箱 『所詮、君は虚無感へ空っぽなんだ』（後書き）

再び、感情が戻った零。

しかし、その感情は - の感情であった。

球磨川の発言が勘に触り、校内であろうと殴り続ける、という零の - な感情を見て、殴られながらも不気味に笑い続ける球磨川。

やがて零は、ある一つの疑問を抱える。

次回はそんな、お話。

第3箱 「何だ、コレ？」（前書き）

球磨川の喋り方に結構な違和感を感じ、改訂。

志布志と蛾ヶ丸の喋り方がムズイす。

段々自分の文章のクセが出てきた……

目立たないようにはしてるんですが……

兎にも角にも第3箱目。

第3箱 「何だ、コレ？」

1

結局、

僕は一体、何を信じたら良いんだろう？

めだか、とやはらは、僕は何かを持ってもいい、といった。
球磨川、とやはらは、僕は何も持たなくていい、といった。

何が正しくて、

何が間違っているのか。

虚無な僕には、分からないし、

どうせ僕は虚無^{ゼロ}なんだから、知る必要も無いか。

でも、一度信じたものを否定されたことは、むかついた。

だから、殴った。

何だ、この感情？

何だ、コレ？

2

バキィッ！！

「……！？」

骨が碎ける音だった。

球磨川 楔の、腕の骨が。

だが、彼——零が碎いた訳では無い。

新たに現れた二人の過負荷——
マイナス

「ハッ！虚無印ゼロの過負荷マイナスだ？ふざけた事言っ
てんじゃねーよ！」

志布志 飛沫、と

「全く…確かにふざけているのは分かりますが……」

グチャッ！！

「――同感です」

蝶ヶ崎 蛾ヶ丸、によって。

「う、うわあああ！！」

零が知った二つ目の感情、それは――

「全く！腕を^{このこと}へし折るで叫ぶなんて！わっば^{マイナス}過負荷にはほど遠いんじゃないのか！？」

「それは、同感ですね。頭を^{このこと}踏みつぶすで叫ばれてはこちらが迷惑ですよ」

『いや、彼は今、間違い無く^{マイナス}過負荷だよ。虚無^{なにものもない}からって、油断するのは良くないぜ？』

ふう、と溜息交じりで喋る蛾ヶ丸。

その横には、

確かに腕を折られた筈なのに、

確かに頭を潰されたのに、

まるで全てが“無かったこと”にされたように、平然と、無傷で立ち上がる球磨川 楔が居た。

「油断、ですか球磨川さん。まあ、少しぐらいは気をつけますが、彼はあの状態ですし、油断はするまでも無いでしょう」

ああああ！、と叫び続けている零を見ながら、余裕な態度をとる蛾ヶ丸。

その姿に、油断大敵、の文字はない。

『その態度が油断なんだぜ？蛾ヶ丸ちゃん。何度も言うつよ？』

『今の彼は、マイナス過負荷だ』

球磨川がそういったのと同時に、さっきまで錯乱していた筈の零が、マイナス過負荷に向かつて飛びかかる。

感情がない故の、何も考えがない手を使った攻撃。

それは、油断をしていた飛沫と蛾ヶ丸の腹部を貫くには、十分な
ものだった。

「人の話は聞くもんだな！！油断はするなって！」

第4箱 「単なる不慮の事故ですよ」 (前書き)

V S マイナス

次回予告風後書きが最近書けてない…

第4箱 「単なる不慮の事故ですよ」

1

気持ち、悪い。

過^{マイナス}負荷のやる事為すことが。

虚^{じぶん}無感がやる事為すことが。

そうか。

これが、不快って感情か。

異常^{プラス}からは、快^{プラス}の感情。

過^{マイナス}負荷からは、不快^{マイナス}の感情。

なるほど、確かに、今の僕は過^{マイナス}負荷だ。

2

ぶちぶちと、肉が裂かれ、血管が破れる音になる。

手に、生温かい感触が伝わる。

貫通させた腹から無理矢理手を引き抜くと、ソレは腹から、どくどくと流れていく。

それを見て、球磨川は、

『すごい、零ちゃん。いい感じに過負荷マイナスしてるね！でもね、君にも言っておくよ？』

『油断大敵、だぜ？』

そう言った瞬間、貫通させてばかりと開いた腹の穴が、明らかに致死量に達する程まで流れていた血が、全て“なかったこと”にされていった。

だが、それは志布志 飛沫だけに起こった現象だった。

彼、蝶ヶ崎 我ヶ丸は違った。

彼は、その現象が起こる前、つまりは、零が手を引き抜いた瞬間から、既に傷は無く、何事も無かったかのように立ち上がっていた。

『君が虚無ゼロなら僕は虚構マイナスかな？同じ虚同土仲良くしようぜ？……つて言いたい所だけど、早速蛾ヶ丸ちゃんがやったみたいだね？うーん、残念』

口の中から、血の味がする。

誰かに殴られたわけでもない。

まさかと思い、腹を見ると、そこにはぽっかりと、

拳で貫かれたような大きさの穴が開いていた。

だが、球磨川と蛾ヶ丸は、動くことなく、見下す（マイナスからしてみれば、見上げる）ように立っていて、志布志は、腹を貫かれた時の出血量のせいか、気絶している。

「な……なんで……？」

零が最初にしたのは、痛みでも、傷口を見てのショックでもなく、疑問だった。

「何、単なる不慮の事故ですよ」

瓢々と、まるでそれが当たり前に起こったかの現象のように、蝶ヶ崎 蛾ヶ丸はそう、言つてのけた。

「不慮の……事故……？」

喋る度に、口から血が溢れる。

『押しつけてるんだよ』

はっ、と球磨川の方を見る。

動く度に――鉄臭い匂いが口の中に充満する。

『蛾ヶ丸ちゃんは、過^{マイナス}負荷の中でも、理性的な過^{マイナス}負荷でねえ、どうして理性が破綻しなかったのか、それには訳があるんだよ』

零の身体の傷が治癒――いや、無かったことにされていく。

『押しつけるんだ。傷や痛みに始まり、心的外^{トラウマ}傷も、精神抑^{ストレス}圧といった、負傷^{ダメージ}までも』

完全に、零の身体の傷が、文字どおり消えて無くなった。

『でもさ、押しつけられたトラウマと違って、一体どこへ、行ったんだろうねえ？』

トラウマ、という精神的なダメージは、外面的ダメージへと変換される事は無い。

それは、つまり――

「他人に、押しつけた……」

『ピンポン、ピンポーン！大正解っ　じゃあ、押しつけられた人のその後ってどーなるでしょーか？』

言うまでもない、とはまさにこの事だ。

まして、過^{マイナス}負荷が受けてきたトラウマを、常人が耐えられる道理など、無い。

「う、あ……ああああ！！」

嘘^{マイナス}ではない、心からの叫び。

心からの、負快感。

そして、止めを刺すように、

『まあ、君の場合、さっきの怪我は自業自得だね！人を傷つけようとした罰なんだよ！僕たち過^{マイナス}負荷だって人間なんだ。気持ち悪いからって、差別するのはいけないぜ？』

「……………！！」

零の心は、もはやぐちゃぐちゃにかき回されていた。

ナニガタダシクテ、ナニガマチガツテイル？

ぐるぐると、その疑問はかき回された零の心で回っていく。

負のスパイラル、という形容も当てはまる。

過^{マイナス}負荷は、虚^{ゼロ}無感の心までも、奥深くまで抉っていく。

ただ深く、深くまで。

第5箱 「何で、あの時」

1

何度も言ってるじゃないか。

僕は、虚無^{からっぽ}だつて。

何も持たないんじゃない。

何も持てないんだ。

何か持ったら、何か失う。

だから、自分から何も持とうともしない。

筈、だったのに。

何である時、生徒会室なんかに行ったんだろう？

何である時、悩み相談なんて言ったんだろう？

何である時、悩みなんか持ってたんだろう？

2

『あーあ、零ちゃんも壊れちゃったし、もう帰ろっか？』

零は現在、壁に寄り掛かって、座り込んでいる。

目は、死んでいた。

そんな零をちらり、と見て蛾ヶ丸は一言、

「そうですね、ところで、彼はどうするのです？」

零を心配しての一言ではなく、どう処分するのか、という質問だった。

『うん？そんな質問するなんて、やっぱり蛾ヶ丸ちゃんは僕等とは違って、理性的だ。いいよ、今の僕は気分が良いしね。教えてあげるよ』

『――もちろん、放っておく』

蛾ヶ丸には、球磨川の言っている事の、理解が出来なかった。

何故、自ら過負荷マインナスにしておいて、何故あんな脅威になりかねないモノを放っておくなんて。

『そりゃあ決まっているさ。さっきも言ったかもしれないけど所詮、彼は虚無感からっぽなんだ。何も持てない、持っちゃいけない、虚無感ゼロなん

だよ。だから、例えば僕が彼を不幸にしても、すぐ幸せになって、虚無感になるのさ。だったら放っておくしかないだろう？ - - それに僕らには後一人、手駒があるからね。まっ、彼は遅れて登場するだろうけどね』

蛾ヶ丸は、理解した。

ここで零を放っておく理由と、球磨川は自分より遙かに下の、常軌を逸した過負荷マイナスである、ということ。

彼は、そんな過負荷くまがわみそぎと共に、未だ気絶している過負荷しぶししぶきを引きずって、- 13組の教室へと帰って行った。

3

人吉 瞳、という元診療外科医の女性がいる。

女性、と形容するのは確かに正しいが、彼女の姿を一目見たとしても、明らかに赤いランドセルの似合う小学生少女、と形容する人物が圧倒的だろう。

例えば、神宮 零もその人物の一人だ。

彼は、何も無かったが故に、一般的に中学生、と呼ばれるまでは一切、人との接触を絶っていた。

言葉は、知らぬ内に話せていて、異常プラスの母と過負荷マイナスの父は、知ら

ぬ内に居なくなっている。

事実、何も無い少年、零。

彼も初めて、人吉 瞳に初めて会う人物の一人だ。

4

気がついたら、零はベッドの上で寝ていた。

病院、かと思っただ、それにしても設備なんかもなく、病院のソレとは違う、と思う。

何故、思う、なのかは、言うまでもなく、零が虚無^{ゼロ}だから故、となるが。

とにかく、一体、何時、誰が、自分をここへ運び出したのか、それが分からない。

「気がついた？」

ハッ、と自分が声を掛けられた事に気づく。

「君、誰？なんで小学生がここに……」

「失礼な、私は人吉 瞳。高校生の息子を持つオバサンよ」

その時、ぐちゃぐちゃにかき回された零の心が、巻き戻されていくように、少しずつ、少しずつ元に戻っていった。

彼女は、^{アブノーマル}異常なのか。

そう思った時、零の心は再び虚^{ゼロ}無へと還った。

第6箱 「何かを持っても、いいんじゃないか？」（前書き）

虚無編クライマックス!!

…まで後一話。

第6箱 「何かを持っても、いいんでしょうか？」

1

また、この感覚だ。

まるで、全部が巻き戻されていくようだ。

気持ち悪い、あのマイナスの感情が、ゼロへと還元されるように。

でも、それが僕にとってのアタリマエ。

プラスになったら、同等のマイナスを受けて、ゼロになり、

マイナスになったら、同等のプラスを受けて、ゼロになる。

日常茶飯事、と言ってもいいかもしれない。

また、虚無^{ゼロ}になった僕は、次はどうなるんだろうか。

楽しみでもあって、怖いや。

2

「君、名前は？」

人吉 瞳が零に向かって尋ねる。

「神宮 零」

零は、その質問に対して、必要最低限の単語を並べて答える。

無感情で、無感動の平坦で平淡な声で。

「――！？」

瞳はかつて、診療外科医だった。

異常な人間や、過負荷な人間を調べるための、今思えば、フラスコ計画にも関係してくるであろう病院で勤務する、診療外科医だった。

それ故だろうか、人の心や感情に敏感だった瞳は、こんなにも感情が無い、零の話し方に驚いていたのだ。

感情が無い故に、揺らぎやすくもある、零の話し方に。

「あの」

今度は、さっきとは打って変わって、感情を感じる言葉だった。

「？　どうかした？」

今までの平坦で平淡な声とは違い、抑揚があり、感情のこもった声で、神宮 零はこう言った。

「僕って、何かを持っても、いいんでしょうか？」

僅かな、沈黙。

この問いの正解は、瞳には分からない。

そもそも、この問いの正答なんてないのだ。

正答が無い……それこそが、正答。

だから瞳は、もっとも正答に近いであろう答えを告げる。

「それは、私が考えることではないわ」

最初、零は、自分が何を言われているのか理解ができなかった。
だが、その疑問は、すぐに解消される。

「その答えは、アナタ自身が決めるもの。人の数だけその答えはあるって感じかな？」

だから、私はその質問には答えてあげられない、と言って。

「そう……ですか」

アナタ自身で……僕自身で、決めること。

何度も、何度も、心の中で復唱した。

だけどまだ、分からない。

月並みだが、パズルのピースが、一つだけはまらないような、そんな感じ。

どうすれば、分かるだろうか。

まだ、分からない。

第終箱 「受け入れるんだ」(前書き)

第一章・完結！

第終箱 「受け入れるんだ」

1

生徒会室

「……………」

「どうした？めだかちゃん。さっきから何も喋らねーけど」

「……神宮同級生の事だ」

「神宮つつーと……ああ、さっきの………そんで何を考えてたんだ？」

「うむ、……言いづらいが、私は彼の悩みに対しての答えを間違っ
てしまったようだ」

「！？」

「何、そう驚く事でもなかるう。私だって人間なのだから、失敗は
するさ。……それにしても、神宮同級生が気がかりだ。行くぞ善吉
！1年0組へと！」

「いやいやいや、めだかちゃん！

俺が言いたいのはソコじゃねえ！

何でお前が失敗“出来た”んだ！？

お前は生まれてこの方、一度のミスなんてしてないじゃないか！
正しすぎるのがお前じゃねーのかよ！

「どうした？善吉？もう行くぞ？」

「お、おう……」

「おっと、忘れ物をする所だった」

クソ！訳分かんねーぜ！

めだかちゃんのミスも！

1年0組の事も！

めだかちゃんが間違えてしまった元凶の神宮 零の事も！

2

瞳と別れ、保健室を後にした、零。

と言っても、これから行く場所とかも無いので、またウロウロと
校内を無意味に徘徊するしかないのだが。

ふと、自分のクラスである、1年0組から、声が聞こえた。

誰かいるのか？と思い、教室のドアを開けると、

「……………!？」

そこは、以前とは違う何も無い教室では、無かった。

花が、あつた。

色とりどりで、香りもそれぞれ違う、花が。

そんなたくさんの花が置いてある教室の中心に、

黒神 めだかが、居た。

突然、頭の中がかき回されるような、そんな痛みを感じた。

ナニカヲモツテモイイ、ナニモモツナ、ナニカヲモツテイイ、モツナ、モツテイイモツナモツテイイモツナモツテイイモツナ……

「あ、あああああああ!!」

「……………!？」

突然、苦しみだした零に、善吉は一瞬何が起こったか、分からなかった。

だが、めだかはそんな零に向かって歩いていった。

自分が間違っていた事を確信し、何も無かった少年に、真の答えを伝えるために。

そして、苦しんでいる零の手を取って――

「すまない、神宮同級生。私が、間違っていた」

ただ、静かに、自分の非を認めるめだか。

「――！？」

零の目が大きく見開かれた。

彼の中では、様々な感情が渦巻いていた。

プラスなものから、マイナスのものまで。

ある意味、自分から感情、というものを拒絶していたのかもしれない。

何も無い故に、失う事を知らなくて、

何もない故に、失う事が怖くて。

拒絶、した。

――何か持ってもいいのかなあ？――

何も無かった――全てを拒絶した筈の少年の願い。

何かを持ちたい、でも、失いたくない。

持ったら、無くなっちゃうから。

虚無感。

何かを持つと何かを失い、何も無くなるになるスキル。

それは、スキルでは無く、彼自身だったのかもしれない。

3

「本当は私が決めるべきではないものだったのだ。あの質問は、だから、貴様をこのような状態にしてしまった。……本当に、すまない」

零から、叫びは聞こえなくなった。

やがて、今までの声とは打って変わって、弱く、か細い声でこう言った。

「……ったら……ったら……どうしろってんだよ……正しい答えは何なんだよ？何が正しくて！？何が間違ってるんだよ！？」

それは、零が自分の心と向き合って初めて抱いた一つの疑問。

「ああ！何度も自分で考えたさ！でも、分からなかった！」

自分で考える。

それは、瞳に、めだかと同じ質問をした時に返ってきた答え、だ。

「だったら……自分で考えても分からないのだったら……誰かに聞くしか無いだろ……？」

めだかは、0組にくる前、正確には忘れ物をした、と言った時、答えを言うべきかどうか迷っていた。

ここで本当の答えを言ってしまったら、零は何も成長しないのでは無いか、と。

確かに、間違えてはいるが一度答えを出しておいて、その迷いがあるのはおかしい、とは思ってはいたが。

だが、それも杞憂に終わったようだ。

事実、零は、自分で考えた結果、答えが出ず、苦しんでいたのだから。

なら、手を差し伸べるのが正解だ。

「受け入れるんだ」

ハッ、と零は顔を上げる。

「受け、入れる……？」

「そうだ、どちらか片方しか信じない。その考えは捨ててみる。何も無いゼロでは無く、どちらも平等に持った無限大のゼロになれ。それが、私の出した答えだ」

何かを失い、何もないゼロと、

何かを持ち、無限大の可能性を持つゼロ。

同じゼロだが、違うゼロ。

「そうか……うん、そうだ。僕が探していた答えは、それだったんだ」

この日、この時、この瞬間。

零は何も無い、虚無^{ゼロ}では無く、可能性を持つ無限^{ゼロ}になった。

4

生徒会室

「なあ、めだかちゃん？」

「どうした、善吉よ？」

「どうして、0組に花を持っていったんだ？」

0組に置いてあった色とりどりのたくさんの花の事だ。

「ああ、そのことか。何、深い意味は無い。ただ、神宮同級生が初めてここに来たときに悩みを解決――いや、解決したつもりでいただろう？その時も、解決した証としての花を飾ったのだが……結局、答えは間違ってたっていた」

だから、と一呼吸置いて、

「0組にはお詫びの印も込めて、そこに飾るはずだった花を0組に送ったのだ」

「にしては、量が多すぎやしないか？」

「お詫びの印も込めて、と言っただろう？」

そーかい、と頭をかく善吉。

そこでちらつと、視界に移る新しい花を見る。

「で、それが今回の解決した証、ね」

花の名前はレインボーローズ。

花言葉は、“無限の可能性”。

第1箱 ぶらすとまいなす その1（前書き）

これは、ちょっと昔のお話。

とある二人の、物語。

章末閑話・ぶらすとまいなすの始まり。

第1箱　ぶらすとまいなす　その1

プラス思考でプラス志向、天真爛漫、幸せ少女。
という、異名が付いた少女が居た。

名前は、津久見　甘つくみ　じょうという。

いつだって前向きで友人も多く、小学校一年生の時の友達は百人を軽く越えていた。

誰に対しても、優しく。
誰に対しても、プラスに。

それが、幼い頃からの甘のモットーであり、生きている理由でもあった。

- - 友達が居ないと寂しいから。

それだけで、小学校卒業時では、全校生徒全員が甘の友達になっていた。

人付き合いが異常に上手な彼女は、中学校に入ってもそのスキルを発揮し、今度は入学して一ヶ月後には全校生徒の99・9%は、彼女の友達になった。
- - 残り、0・1%を、除いて。

その0・1%に該当するのは、たった一人の生徒だった。

マイナス思考でマイナス志向、悪逆無道の不幸少年。

という、異名が付いた少年が居た。

名前は、神宮 一はつという。

いつだって後ろ向きで、友人は0。

誰に対しても劣等感を抱く。

誰に対してもマイナスに。

それが、一が背負わされた、マイナス。

- - 全て、捨ててしまえ。

たったそれだけで、周りからは忌み嫌われ、自らを不幸にしていたのだ。

そんな彼が、唯一彼女の友達ではない人間だった。

まるで、鏡に合わせたように真逆で、合い容れないはずの二人。

そんな合い容れないはずの二人は、ひよんな事で知り合った。

全校生徒99.9%を友達にした廿は、“同じクラスでありながら、誰とも話さず、自分から輪の中に入らない”少年を見つけた。

廿と友達になったものは、その友達同士も友達になるのだ。

甘は全校生徒の名前をきっちり把握している。

いや正確には、友達の名前は全て、一字一句間違える事無く、記憶している。

それは、いたって普通の事だ。

例えば甘で無くとも、友達になった人間の名前や顔は自然に覚えるものだ。

ただ甘の場合、その人間の数が千近く居るだけなのだ。

けれども、そこにいたのは、名前を知らない少年だった。

その少年は、学校内にも関わらず、マンガ雑誌を読んでいた。

俺を見るな。

俺を気にするな。

俺に、関わるな。

そんな思いが、彼の周りからまき散らされていた。

甘は意を決して、では無く。

名前の知らない少年と“友達”になるために、その少年のもとへと向かった。

机の位置は、甘が右端の一番前なら、その少年、一は左端一番後ろ。

何もかもが正反対。

合い容れない。

そんな二人の関係は、たった一言で壊された。

「私、津久見 甘って言うんだ。よかったら、私と友達になろうよ
！」

それが、二人の出会いだった。

第2箱　ぷらすとまいなす　その2（前書き）

あらすじでも書きましたが、第二章の話を消すことになりました。
よって第一章の最終話を物語の完結とします。

ちなみにこのぷらすとまいなすはもう一つの物語、として連載させていきます。

第2箱　ぶらすとまいなす　その2

1

「僕と――友達に？」

何を、

何を言っているんだ？

「そう、私と――友達になろう！」

「ふざけてんの？」

いや、本当に。

ふざけているのか？彼女は？

「ううん？ちつともふざけてないよ？むしろ大真面目。だってさ、友達が居ないって――寂しいでしょ？」

「あのさあ。俺をアナタと同じだと思わないでくれる？――俺に、友達は要らない。だから一人で過ごしてるんだ。それに、アナタには友達が売る程いるじゃないか。俺に構う必要なんかない」

そう、要らない。

俺は孤独が、“似合っている”。

「売るほどなんて居ないよ。それより、友達を売るなんて――私に

はできない」

「友達思いだな。――ま、本当に友達を思っているなら、俺“なんか”には構わないほうがいい。この学校では――いや、この学校でも、俺には敵しか居ない。アナタの友達も、敵だ」

“では”じゃない。

“でも”だ。

「でも私はアナタの敵なんかじゃないよ？」

「――――！」

確かに、彼女は俺に――友達になろうと言った。

その言葉には、敵意は無い。

「それに私の友達になったら、私の友達は皆――“友達同士”になれるんだよ？」

だから、必然的に敵は居なくなる、か。

クソ食らえだ、そんなもの。

“こんな”俺に、敵が居なくなるはずがない。

俺に敵を作らせたくないなら――世界中の人間を全員友達にするんだな。

「じゃあ、世界中の人間を私の友達にするからさ、まずはアナタを友達にしなきゃね！」

「……何でそうなる」

「え？だって世界中の人間を友達にするんでしょ？だったら最終的にはアナタも友達になるんだから、今友達になっても構わないですよ？」

コイツ……本当に世界中の人間と友達になるつもりか？

「……なれる訳、無いじゃん」

「？」

「世界中の人間を友達にするなんて、馬鹿な事、出来るわけないじゃん。そんなのやるだけ無駄だよ、無駄」

先ず、俺と友達になる事すら、不可能すぎるんだよ。

んじゃ、もう帰るか。

「あつ……待って！」

知るかよ。

これでもう、この学校は俺の敵だけだ。

第3箱　ぶらすとまいなす　その3

1

その日から、俺は一週間学校をサボった。
もともと義務教育だから仕方無く通っていた学校だったのでサボったところで大して問題はない。

「友達 - - 何度聞いても、馬鹿げてやがる」

例えなつたとしても - - 相容れる筈が、ねえ。
いや、相容れねえから、なれねえのか。

彼女と俺は - - 真逆なんだ。

彼女が右と言えば、俺は左と言って。

友達になろうと言われたら、友達にはならないと言う。

鏡写しのように、真逆で - - 似ているんだ。

+1と-1の絶対値が1のように。

津久見⁺甘と、神宮⁻一¹。

ぶつちやけ。

俺は、彼女の事が好きだ。
それどころか大好きで、
大嫌いだ。

L o v e a n d H a t e .

好きで好きで - -
嫌いで嫌いで - -
たまらない。

「じゃあ、友達になろうよ!」

だから言っただろ?

好きだけど - - 嫌いだけど

だから、相容れない。

つか、その前に。

「……不法侵入も、立派な犯罪なんだぜ?」

「やだなあ、ちゃんとピンポン押したよ?そしたら鍵開いてたから
入っただけ。おじやましますもちゃんと言っただし」

そうか、分かった。

だけど一つだけ問題があるぞ。

「今の俺の心の葛藤……全部聞いてたのか？」

「うっん、全部じゃないよ？……例えなっただとしても……の辺りから聞いてたね」

まいったな。

それじゃ、俺は……半分彼女に告ったようなもんじゃないか。

……恥ずかしいっ（棒）

「いや、恥ずかしいと言ったらコッチの台詞だよ……」

それは自業自得だろ？

不法侵入（まがい）の事をした、アナタが悪い。

俺が、恥ずかしい思い（棒）をしたのも、全て。

「だから、ピンポンもおじやましますも言っただって！」

「ちなみにピンポンは世間一般ではインターフォンというんだぜ？」

つか説明せんな。学校サボりで“馬鹿”な俺に。

「……どうでもいいけどさ、何でさっきから俺の心を読んでんの？」

「ああ、私は生まれた時から……友達が出来た時から、友達の心が読めるんだ」

人それを友線回線フレンドシップと言います！と付け足した。

友達か、そうか。

「何時の間に、俺は友達という扱いになった？」

「だから - - 例えなったとしても - - って辺りだよ」

例え“なった”としても。

“なった”、前提での例か。

なんだ、“なった”という前提を出した時点で、

俺は、彼女と友達になりたかったという事か。

だから彼女の友線回線は、繋がったのか。

全く、どこまで彼女は - - 僕と相容れないんだよ。

相容れないし、愛容れない。

彼女が俺を友達と思った時点で、

俺は彼女の友達にはなれない。

「そついや、俺のさっきの告白の返事 - - 聞いてなかったな」

曖昧なのは、ごめんだ。

「勿論、OKだよ！」

これでこの一言でもう、愛容れねえ。

「そうか、俺はお前の事が、嫌いだ」

人それを、友線回線と言います！

つまり俺の場合。

人それを、ダウンバッテリー接続負荷能と言います。

全部アナタが悪いんだぜ？

接続不可能な地点に、無理矢理入り込んだ、アナタが。

第終箱 ぶらすとまいなす その終わり

1

彼は人を愛せない。
愛したいけど、愛せない。
愛した人とは、愛入れないから。

2

「俺は悪くないけど、ごめんな。アナタの事は、好きだけど、大好きだけど、大嫌いだ」

もう、無茶苦茶だろ？

訳分かんないだろ？

だって、俺だって、訳が分からない。

こんな俺でも、自分にだけは素直なんだぜ？

所詮後付けされてる人格なんか、関係無い。

もつと、原点ともいえる――俺の身体が、素直じゃない。

好きだけど嫌い。

やない。

人格おれは悪くない。

悪いのは全て、その根元でもある、肉体おれだ。

例え人格が彼女を好いていても、肉体は嫌いだ。

だって、根本的に真逆だから。

ぶらすとまいなすは逆だから。

それでも、絶対値は同じだから。

この、矛盾して、曖昧な感情が起こる。

「俺は悪くないけど、ごめんな。こんな戯言に付き合わせて」

それでも、彼女は俺の目を見て、

「いいんだよ。悪いのは、私なんだから」

自己犠牲――違うか、これは普通に彼女が悪い。

「だから、こっちこそごめん」

そういつて、彼女は土下座した。

止めるよ、止めてくれ、止めて下さい。

アナタは――土下座なんてしちゃ、駄目だ。

ましてや、俺“なんか”に――！！

「俺が――悪かった。だから、土下座なんて、止めてくれ」

俺は、彼女の前で、土下座した。

いくら、人格おれが悪くなくとも、肉体おれが悪いのだから、俺が悪い。

「何でもする。何にでもなる。だから、許してくれ」

彼女は、俺と同じ目線のまま、こう言った。

「じゃあ……私の友達になって」

「――分かった」

「ありがとう。そして、ごめんなさい。何でもします。何にでもなります。だから、許して下さい」

あくまで彼女は、俺と同じ“目線”だった。

「だったら――」

「俺の、友達になってくれ」

俺の嘘偽り無い、清廉潔白の、思いだった。

「喜んで」

俺たちは、友達になった。

3

人間は、変わる事が出来るし、変える事も出来る。

例えば、俺の友達。

彼女は、人を自分の友達に変える事の出来る人間だ。

そして俺は、そんな彼女の影響で、変わった人間。

きつと彼女に出会った時から、俺は変わっていたのだろう。

とにかく、俺と彼女の交友記録は、ひとまずおしまいだ。

その後どうなったかは、皆の想像に任せよう……いや、一つだけ、語らなければいけない話があった。

プラスな彼女とマイナスな俺。

それが生み出した、ゼロのその後のお話を。

第終箱　ぶらすとまいなす　その終わり（後書き）

気づいている人もかなり多いとは思いますが……

彼女の名前は、^{じゅじゅ}廿。

つまり^{じゅじゅ}十で、つまり＋（プラス）です。

続いて、2箱から語り部をやっていた^{はじめ}一ですが、彼はつまり、
（マイナス）です。

以上、二人の名前の由来でした。

第0箱　ぶらす・まいなす・ぜろ

0

例えば、何も持たなかったとする。
金も、家族も、友人も。

だとしたら、その人はいうまでもなく、0だろう。

何も、無いのだから。

次に、全てを同じだけ持ったとする。

善も悪も、情も非情も。

だとしたら、その人はいうまでもなく、0だろう。

プラスもマイナスも、同じ量を持っているから。

同じ0だけど、違う0。

何も無い0と、何かを持っている0。

彼、神宮　零は、何も無い0だった。

けれども今は、何かを持っている0だ。

友人だって、『家族』だって。

彼の両親は、決して彼を捨てた訳では無く、彼の圧倒的な虚無感に負けて、存在すらしない状態になっていた。

けれど、今の彼は違う。

彼は、変わったのだ。

生まれてこの方、見たことのない両親を、持てたのだ。

そして、生まれてこの方、言う機会すら無かった言葉も、持てたのだ。

彼は、何かに導かれるように、一建の家へと向かう。

家など、持つてはいなかったけど、家族も、持つてはいなかったけど、ようやく。

「……ただいま」

零は、何かを持った喜びを噛みしめる事ができたのだ。

ぷらす・まいなす・ゼロ

完

第0箱　ぷらす・まいなす・ゼロ（後書き）

紆余曲折を経て、ようやく物語は完結しました。

戦拳編もやろうとしてましたが、もともとは章末閑話のつもりのがらすとまいなすで登場した二人に愛着が出来てしまい、このまま戦拳編をやったら二人の行方が曖昧なままになる！と思い、急遽物語を改変させて、戦拳の話はなかった事になりました。何も考えずに投稿してしまい、本当にすいませんでした。

最後に、このぷらす・まいなす・ゼロを読んで下さり、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2760t/>

ぷらす・まいなす・ゼロ

2011年7月20日12時36分発行